郷土への扉
The gateway to local history

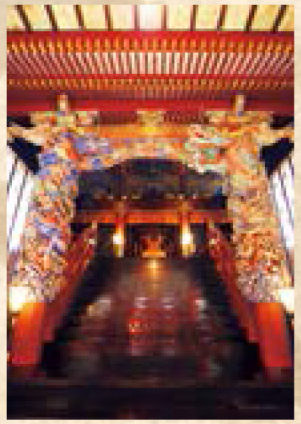
龍の柱

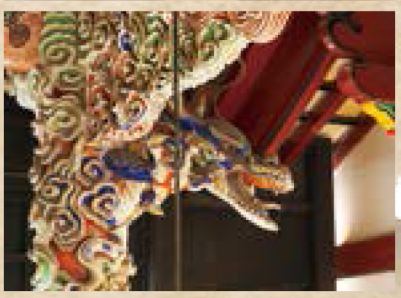
今年の干支は「寅」。一緒に使われることが多いのが「龍」です。今回は霧島神宮・鹿児島神宮にある龍柱について説明します。

龍柱とは

霧島神宮と鹿児島神宮の社殿が国宝、重要文化財に指定されるという報道の際、大きく取り上げられたのが龍柱です。龍柱とは、その名のとおり龍を表した柱のことです。この柱は本殿の※1向拝を支える柱で、本殿の入口でもあります。単に龍が巻き付いている龍柱は全国に多くありますが、南九州の神社に見られる龍柱は、龍の胴体の間が瑞雲で埋め尽くされているという特徴があります。瑞雲とは五色に彩られた雲のことで、めでたい兆しともされます。

龍が雲と共に立ち昇る姿を彫り込んだ龍柱は、中国における龍柱の影響を受けていると考えられ、霧島神宮や鹿児島神宮をはじめ、蒲生八幡神社（姶良市）、東霧島神社（都城市）などに分布しています。これは江戸時代、薩摩藩が琉球交易によって、東アジアの文化を取り入れていたからであると考えられます。





（上から順に）霧島神宮の龍柱　鹿児島神宮の龍柱　阿形の龍（鹿児島神宮）　吽形の龍（鹿児島神宮）

神宮の龍柱

霧島神宮と鹿児島神宮の両神宮に存在する龍柱。どちらも柱を龍と瑞雲が覆い尽くし、柱が完全に隠れています。柱の下部には波が表現され、水中の龍が雲を伴って天に昇る様子が表れています。

龍は2頭が並び立ち、向かって右側が口を開く阿形、左側が口を閉じる吽形となっています。柱を上部で連結する頭貫の両端には象が表現され、こちらも左右で阿吽の形をしています。さらに左右の柱の間の※2水引虹梁部分まで瑞雲で覆い尽くされ、全体的に色鮮やかに彩られています。龍柱の装飾は、そこから先が神の領域である本殿の結界・入口として、荘厳な形になっていると考えられています。

霧島神宮の龍柱は、普段の参拝では見えない所にあります。本殿と拝殿に高低差があり、縦の大きさを感じることができます。特徴としては柱が太く、がっしりとしています。南九州の龍柱の中で最も古いため、他の神社の龍柱に影響を与えた先駆けとも考えられています。

一方、鹿児島神宮の龍柱は、普段の参拝時に見ることができます。霧島神宮に比べて柱は細い造りですが、本殿や拝殿の大きさに合わせて横に長いのが特徴です。

「龍吟ずれば雲起こり、虎嘯けば風生ず（龍が叫べば雲が巻き起こり、虎がほえれば風が生じる）」。それぞれが相伴うことによって勢いが増す様子を表します。龍と雲が刻まれた龍柱が存在する両神宮に国宝、重要文化財指定という追い風が吹きました。この風に乗って、寅年が皆さんにとって良い一年になりますように。

（文責＝小水流）

※1　社殿前面の屋根が張り出した部分。入口の階段上に作られるので「階隠」ともいわれる。

※2　向拝正面の梁で、中央が反り上がって弧状になっているもの。

開催中

■霧島神宮・鹿児島神宮社殿展

霧島神宮と鹿児島神宮の社殿の写真を展示し、文化財としての魅力を説明します。めったに見ることができない霧島神宮本殿壁画の写しなどの展示もあります。

- 期間＝2月27日（日）まで
- 場所＝隼人歴史民俗資料館（鹿児島神宮境内）
- 入館料＝大人150円、高校生以下80円

問＝社会教育課　☎(64)0708